



倉田紘文先生近影

## 倉田紘文先生のこと

倉田先生は、本年三月を以て正式に大学から退かれることになった。

先生は、昭和四十八年に別府大学国文学科に職を奉じ、以後、今日まで、約二十五年間の長きに亘り、研究活動をなさり又学生に接してこられた。その御研究は、近代俳句を中心とした韻文であった。就中、子規・虚子そして高野素十と続く、写生俳句に興味を持っておられた。それは、御自身が「落」という俳句結社を主宰し、実作活動を営んでおられる俳人ということに、由来するところが大であろう。

先生は、平成八年の末頃から、時として身体の不調に言及されることが、あつたように思う。ある時学生に「耳鳴りがひどい。しかし、その事によって今まで聞き流していた相手の言葉も注意して聞くようになった。これは新しい発見である。」と言っておられるのを耳にしたことがある。翌年一年休職し、今回のことに及んだのである。六十五歳の停年を思うとまだ何年かを残している。その点でも本当に残念であるし、惜しいと思う。特に、今大学は変革の時にあるだけに喪失感深いものがある。

しかし、一方残されている人生をいかに充実させて生きるかということを考えて、右に行くと同時に左に行けないのは自明の理である。今ここで職を辞されて、端然、自適として自分の道を歩まれることも又、すばらしいことだと思うし、その潔さに羨望させられてしまう。

先生の御活躍の様子は、NHK教育テレビなどで、時々拝見しているが、生き生きとした中に清々しさがある。それはそのまま先生の生き方にもつながるものである。そのような姿に接すると無理を言えなくなってしまう。

先生の俳人としての御活躍を心より念願している次第である。長い間御苦労様でした、の言葉と共に多くの御厚意に感謝申しあげたい。

倉田絃文先生 略 歴

昭和15年 大分県山香町生

昭和34年 高野素十に師事「芹」入会

昭和37年3月 大分大学教育学部卒業

昭和42年4月 別府大学附属高等学校教諭

昭和47年4月 別府大学文学部国文学科講師

俳誌「落」創刊

昭和54年4月 別府大学文学部国文学科助教授

昭和57年4月 別府大学文学部国文学科教授

平成4年 「NHK学園全国俳句大会」選者

山陽新聞「山陽俳壇」選者

別府大学図書館長（平成10年3月）

平成9年4月 「NHK俳壇」主宰

第13回国民文化祭大分大会文芸大会俳

句部会長

俳文学会会員

俳人協会会員

日本現代詩歌文学館振興会評議員

俳誌「落」主宰

「NHK俳壇」主宰（NHK教育テレビ・金曜午後8時）

受 賞

昭和39年 大分合同新聞読者文芸年間賞受賞

平成5年 大分合同新聞文化賞（芸術文化部門）受賞

著 書

句 集 発行所

「慈父悲母」 (木耳社)

「光陰」 (牧羊社)

「無量」 (富士見書房)

「帰郷」 (牧羊社)

「都忘れ」 (朝日新聞社)

研究書

「高野素十研究」 (永田書房)

経 歴

大分県芸術文化振興会議常任理事

日本文芸家協会会員

『高野素十の世界』

(梅里書房)

『俳句トピックス』

(毎日新聞)

編集書

他論文多数

『ふるさとを詠う』

(大分合同新聞社)

『山の歳時記』

(小学館)

『花の歳時記』

(読売新聞社)

『自解100句・倉田紘文集』

(牧羊社)

『季句三〇選「死」・「水」』

(蝸牛社)

『落雑詠選集』

(角川書店)

『四季のかおり』

(生活之友社)

『子ども俳句歳時記』

(蝸牛社)

『最初の出版』全四巻

(東京四季出版)

入集

『高野素十』鑑賞と解説

(蝸牛社)

『大分の文学碑めぐり』

(大分合同新聞社)

ほか

『俳句を楽しむ』

(西日本新聞)

『よみうり文芸時評』〈俳句〉

(読売新聞)

『NHK俳壇』「誌上・添削教室」

(日本放送協会)

『俳句朝日』「添削教室」

(朝日新聞)